

黒毛和種去勢牛の肥育終了月齢の早期化が肥育成績に及ぼす影響

○木下正徳・梅木英伸  
(大分農林水産研畜産)

【目的】

県内の黒毛和種肥育農家は枝肉重量や格付の向上をめざした飼養管理を行うため肥育期間が長くなるなどの問題がある一方、近年当試験場でも増体型種雄牛の造成が進みつつあり、肥育期間の短縮や肥育終了月齢の早期化に向けた取り組みが必要となっている。そのため肥育牛の出荷月齢の早期化（生後 8 か月齢肥育開始～ 24 か月齢出荷）が肥育期の飼料摂取量、増体及び肥育成績に及ぼす影響について検討した。

【材料および方法】

試験区（I 区、II 区）は平均生後 8.5 か月齢の黒毛和種去勢牛 12 頭（各区 6 頭）、対照区は 10.6 か月齢の 5 頭を導入し、予備飼育後 2005 年 7 月～ 2006 年 11 月に肥育試験を実施した。各区とも肥育前期の濃厚飼料からの平均 TDN 給与割合を 25%，飼料中 CP 水準を 15% に設定し、肥育前期の期間を I 区と対照区は 6 か月、II 区は 4 か月とした。濃厚飼料は市販 3 飼料（TDN73 ～ 76.5%、CP13 ～ 8%）、大豆粕及びふすまを給与し、粗飼料は稲ワラ、ヘイキューブ及びビール粕発酵飼料を給与した。試験期間は 484 日間とし、I 区は平均生後月齢 24.7 か月、II 区は 24.9 か月、対照区は 26.5 か月で肥育を終了し屠畜後枝肉調査を実施した。

【結果および考察】

飼料摂取量（1 頭当り：現物）は各区で違いはなかった（表 1）が、1kg 増体に要する TDN 量は I 区が他区より少ない結果となった（表 2）。

表 1 飼料摂取量（1 頭当り：現物）単位：k g

	前 期	中 期	後 期	合 計
I 区 濃厚	1070.0	1671.7	1072.2	3814.4
粗	786.7	490.2	185.3	1462.1
II 区 濃厚	657.6	2100.2	1051.0	3808.8
粗	715.3	489.1	185.3	1389.7
対照区 濃厚	1136.5	1593.1	1032.8	3762.4
粗	869.4	387.3	222.3	1479.0

表 2 1kg 増体に要した TDN 量 単位：k g

	前 期	中 期	後 期	合 計
I 区	5.74	7.35	9.46	7.11
II 区	4.07	9.94	9.07	7.37
対照区	6.41	7.80	8.32	7.36

試験開始時、184 日経過後、367 日経過後及び終了時の増体成績を表 3 に示した。肥育中期 6 か月の増体は I 区が良好で、全期間増体量も I 区が良好な結果となった。

枝肉成績を表 4 に示した。枝肉各性状において各区間に有意差は見られなかったが、24 か月齢出荷としては I 区は枝肉重量が良好で、II 区は BMS.No が良好であった。

以上のことから黒毛和種去勢牛の早期肥育において、肥育前期（濃厚飼料制限給餌）期間の長さが枝肉重量に、濃厚飼料飽食期間の長さが脂肪交雑に影響することが示唆された。

表 3 増体成績

	試験開始	前期 6 月 (184 日)	中期 6 月 (183 日)	後期 4 月 (117 日)	全期間増体量 (484 日)
I 区	269.7	458.3 (1.03)	648.8 (1.04)	739.7 (0.78)	470.0 (0.97)
II 区	251.0	433.5 (0.99)	606.7 (0.95)	699.7 (0.79)	448.7 (0.93)
対照区	321.2	501.3 (0.98)	669.4 (0.92)	770.8 (0.87)	449.6 (0.93)

( ) は日齢増体量

表 4 枝肉成績

	枝 重	ロース面積	バラ厚	肝脂肪厚	糶基準値	BMSNo	BCSNo	しまり	き め	BFSNo
I 区	464.9	51.5	6.8	3.3	71.9	4.5	3.2	3.3	3.7	3.0
II 区	439.1	50.5	6.7	3.0	72.3	5.7	3.5	4.0	4.3	3.0
対照区	481.3	52.4	7.2	3.1	72.2	4.8	3.2	3.6	4.0	3.0